OGUNI TOWN

“小さい国”と書いて、小国町。
細菌学の父、北里柴三郎を生んだこの地の人々は、
学びと交流が人を成長させるという先人の教えを守り続ける。
工夫と知恵で先進的な挑戦を続ける地熱と杉のまち、熊本県小国町。

九州のほぼ真ん中、阿蘇外輪山北側に約7,800人が暮らす里山のまち、小国町。総面積の約78％が山林で、年間を通して降水量が多い。その雨がもたらす豊かな水が、この地の良質な杉の成長を支えてきた。

「国小なれど山紫水明」。北里耕亮小国町長がそう表現するまちは、「地熱と木質バイオマスを生かしたタウン構想」を軸足に置く。いずれも、手元にあるものにどう価値を見出していくか？ との問いかけから生まれた、先進的な試みばかりだ。

中心にあるのが、この地の産業の中心を担ってきた小国杉をはじめとする自然資源。とくに80年代後半の木造大建築のプロジェクトをはじめ、2007年には風力発電施設「阿蘇おぐにウィンドファーム」設置を機にカーボンオフセットの森をスタートさせるなど、小国杉の活用にさまざまなチャレンジを続けている。

成果を上げつつあるのが、地熱の里「わいた地区」で進めている、地熱利用の木材乾燥だ。まちのシンボルである湧蓋（わいた）山の山腹に位置するわいた地区は、集落の道や田んぼなど、いたるところから水蒸気が立ち昇る地熱と温泉の里だ。「ある旅行サイトの秘湯部門で1位になるほどの人気があります。この地熱を小国杉の乾燥に活用しようという日本で初めての新しい取組みです」と北里町長。小国町森林組合を中心に事業が進行中で、品質向上を機に小国杉をより競争力のあるブランドとして育成しようとしている。

山を手入れした後の間伐材や端材を地域通貨と交換し、町内の加盟店での買い物などに利用できる「木の駅プロジェクト」も2015年からはじまった。

自然資源を生かした取組みも活発だ。北九州市の中学生を農村宿泊体験で受け入れる「うるるん体験教育」は2005年から続く人気事業で、年間2,000人以上の生徒が訪れる。「農作業を手伝いながら二泊三日で農家に滞在します。帰る時はみんな感動で泣いてしまうんです」と北里町長は目を細めた。

2010年に、将来どんな町でありたいか？ と住民アンケートを行った際、多くの人が、企業誘致や公共施設の充実ではなく「自然環境を大切にするまち」と答えた。そのときの感動が北里町長はじめ町役場スタッフの原動力となった。

子どもたちに地元の木と触れ合う機会を作る「木育」、女性たちが力を発揮する循環型農業の取組みなど、まちの人々が中心の取組みも着実に実を結びつつある。

高齢化、人口減少と小国町を取り巻く条件は決して明るいわけではないが、それにも増して、新しい“小さい国”にチャレンジするエネルギーは大きい。町とJA阿蘇が共同で行う婚活イベントも盛況だ。

町出身の偉人、北里柴三郎氏が提唱した「学習と交流」とは、知恵と工夫で自ら未来を開くこの地の人々の気質そのものかもしれない。

里の木で建て、次世代に継承する

小国杉を使いアートとしても貴重な大規模施設が里山に点在する。そのひとつが1988年完成の小国ドーム。小径の角材5,602本で組んだ三角トラスの集合体である大屋根＝ビッグタートルの存在感は圧巻。設計は熊本出身の葉祥栄氏。

250年前から、この里のシンボルだった小国杉

杉は強く抗菌性に優れ、日本家屋に欠かせない建材。なかでも小国杉は艶と粘りがあり、経年により美しいアメ色に変わっていく。この地の植林は250年前からはじまり、良質の「ヤクノシマ」「ヤブクグリ」の２品種が育つ。写真の建物は、築250年の古民家を移築して建てられた坂本善三美術館。

小国町長　北里耕亮

1968 年、熊本県小国町生まれ。玉川大学文学部卒業後、小国町議会議員、町議会文教厚生委員長、小国町森林組合長を歴任。2007 年、小国町長に就任。

風力発電施設
阿蘇おぐにウィンドファーム

一目山頂付近に 1,700kW×5 基 の風車が建つ。2007年完成の「阿蘇おぐにウィンドファーム」だ。一般家庭約 5,300 世帯分の年間消費電力量に相当する約 1,616 万kWh/年 を発電。近くに音楽家坂本龍一さんらが主宰するカーボンオフセット拠点「more trees の森」がある。

地熱を生かす暮らし

家々の間から湯煙が昇る。地熱で暮らしが成り立つわいた地区の家には、常に蒸気が吹き出す天然のかまどがあり、洗濯物を干す乾燥室もある。隠れた温泉郷として近年人気を博していて、地熱発電で電力をまかなう旅館も登場している。

坂本善三美術館に展示されていた子どもたちの作品

本記事内容は2015年取材時のものです。

地熱で、どこにも負けない ブランドに育てる。

小国町森林組合は、他にはないユニークな事業展開を幅広く行う森林組合。厳選した地域材「小国アースシリーズ」や、地域材流通のCO2削減を価値化した「小国カーボンニュートラル材」、デザイナーと作る家具や小物など独創的なブランド開発は、さながら森林活性化事業の実験室だ。この挑戦に加わったのが、わいた地区の地熱でノンカーボンの木材乾燥を実現した「小国地熱乾燥材」だ。

「乾燥というより養生に近いでしょうか」と、同組合の穴井喜一郎さん。重油による高速乾燥ではなく、約50℃の地熱輻射熱でじっくり乾燥させると、割れにくく木肌の美しい、香りもよい杉になる。現在年間約2,200㎥の木材を生産するが、今後ここからさまざまな試みが生まれてくるはずだ。

「小さなウッドブロックをガチャポンで購入すると小国杉を1本植樹できるC-cubeプロジェクトもはじまりました」と、同組合の入交律歌さんが新しい企画を話す。輸入材隆盛の陰に隠れていた国産材の価値を見つめ直すことで、その豊かさを知る。そんな時代が来ていると感じる。

デザイナーとのコラボレーションによる商品開発

小国杉の美しさに創造力を刺激され、デザイナーがアイデアを形にする。コラボレーションによる魅力的な商品開発も、小国町森林組合ならではの活動だ。

小国町森林組合（左から）穴井喜一郎さん　入交律歌さん　簗瀬和彦さん

他とはひと味違う手法で、小国杉の価値を向上させるブランド施策を展開する。簗瀬さんは、「小国地熱乾燥材」をひっぱった立役者だ。

乾燥は、地下がくれる無料の熱で

わいたの地下から上がる水蒸気の温度は約100℃。料理にも適温で、かまどの熱としても利用されているこの地熱が、木材乾燥のエネルギーになる。従来必要だった化石燃料を購入する必要がなく、燃費もCO2も大幅に削減している。

乾燥＝エイジングという発想

地熱乾燥施設は、現在14棟。施設の床下に熱湯を通すパイプを張り巡らせ、輻射熱で庫内を温める。50℃程度に温められた空気は自然対流で庫内を巡り、木材をじっくり乾燥させていく。

木にやさしい乾燥は、人にやさしい建材に

地熱乾燥は、化石燃料による高温乾燥に比べて木への負担が抑えられ、素材のもつ色合いや艶を失わず、人の目にやさしい淡いピンク色をしている。経年とともに風合いを増し、住む人の心を和ませる。

木が人を集め、小さな経済を育てる。

山をきれいにしてCO2削減に少し役に立って、自分にはご褒美の晩酌を…。ウェブサイトなどでそう謳うのは全国に広まりつつある「木の駅プロジェクト」だ。小国町がこのプロジェクトを導入したのは2015年。山を手入れした後の間伐材や端材を「木の駅」で1トン6千円分換算の地域通貨「モリ券」に交換。町内の加盟店での買い物などに利用できる。

運営主体はコミュニティ施設「木魂館」を管理する（一社）学びやの里だ。1996年に日本初のツーリズムを目的とした市民大学「九州ツーリズム大学」を立ち上げ、「うるるん体験教育」「おぐに自然学校」などエコと地域おこしを結びつけた多様な取組みを進めてきた。

事務局長の江藤理一郎さんは2010年就任。「一般社団法人になり売上を倍にし、自主財源で運営できるようになりました」と振り返る。大学サークルの合宿などニーズにきめ細かく答えてきた結果だ。「木の駅プロジェクト」も順調で、集積場に大量の薪が積まれ、加盟店は160ヶ所を超えて増え続けている。

木の魂が宿る場に、人と木が集まり、地域の輪が育ちはじめている。

企画を収益に結びつける、行動力
一般社団法人学びやの里 事務局長　江藤理一郎さん

学びやの里の運営責任者として、さまざまなプロジェクトに取り組む。たくさんの企画を同時に進めながら収益を上げることでまちおこしに貢献する行動力の人だ。

小国町 木の駅プロジェクト推進事業の概略

モリ券がつくる地域循環経済

CO_2削減のための間伐材・林地残材の活用を、地域経済の一部に組み入れる。それが「木の駅プロジェクト」の理念。活用されてこなかった森林資源を燃料に再利用することでカーボンゼロ社会を実現し、対価として地域通貨「モリ券」を発行し、地域の商業とリンクさせている。

小国杉の大建築「木魂館」

熊本で活躍する建築家、桂英昭氏設計の研修宿泊施設。ユニークな構造は、小国町の伝統構法「置屋根」をヒントにした「ボックス梁」と呼ばれる。1988年築で、経年により小国杉の風合いが増し、独特の風格を醸し出している。

「学習」と「交流」で、里と人をつなぐ

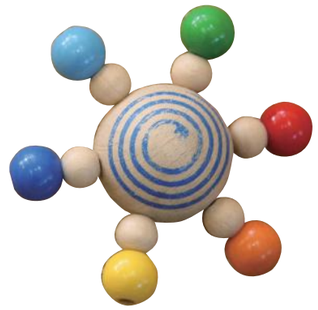
木魂館は、「木の駅プロジェクト」「ムラの暮らし研究所」「おぐに自然学校」など多様な地域づくりプログラムのコアとなる。温泉と宿泊施設、地産地消レストランを併設した学習と交流の総合拠点だ。

木の駅プロジェクトの薪集積場として

捨ててきた間伐材・林地残材が、地域の薪ボイラーや薪ストーブの燃料となる。
木魂館は、施設の薪ボイラーに生かすだけでなく、集積場として流通の要となった。

本記事内容は2015年取材時のものです。

子どもたちの心に
木を慈しむ気持ちが育っていく。



部屋に入ると、たくさんの木のおもちゃや遊具の間を、子どもたちが夢中で駆け回っていた。「カンガルーのぽっけ」は、遊びを通して木に親しむ「木育」を取り入れた子育て支援施設だ。未就園児と保護者や家族、妊娠中の女性が出会う交流の場でもある。

小国町は２０１３年に木育を推進する「ウッドスタート宣言」を実施。以来、木のおもちゃや遊具を通して子どもたちが木の良さを学ぶ場として活用している。

「木を育てる人、切る人、運ぶ人、作る人がいて、このおもちゃになることを、体験を通して子どもたちは知っていきます」と、保育士木育アドバイザーの時松比佐代さんは、地元の木を使う意義を強調する。「昔の竹のおもちゃを作るイベントのとき、集まった町の高齢者のみなさんが、子どもの頃を思い出し感動してくださったんです」と振り返る。「木育」の恩恵を実感しているのは、ひょっとして大人のほうかもしれない。

遊ぶほどに、子どもたちの心に、里の木を慈しむ気持ちが育っていく。その心こそ将来のゼロカーボン社会の土台になるはずだ。

遊びを通して木を知る「木育」

木のおもちゃや遊具を通して、子どもたちの「知育」「徳育」「体育」を育む「木育」。小国町では郷土の小国杉を生かすことで、地元の自然や人との関わり方を学ぶ機会と捉えている。

遊ぶことが生きることの子どものため

おもちゃは、子どもの五感に働きかけ、遊びながら他人との関係や手の役割を自然に体得していく。親とともに遊ぶことで、コミュニケーションスキルも身につけていく。

廃校になった小学校を子育て支援拠点に

この部屋で、以前は小学生が授業を受けていた。人口減少で廃校になったが、子育て支援拠点「カンガルーのぽっけ」として、今また子どもたちの歓声があふれている。

木からの学びを、世代を超えて

カンガルーのぽっけ
保育士　木育アドバイザー
時松比佐代さん

卒園した幼稚園に保育士として赴任したとき、自分が使っていた木の食器が、まだそこにあった。木の良さをあらためて知り、子どもたちに伝えようと思った。

循環型農業の真ん中に、
元気がある。

94歳の女性が〝私の生きがい〟と言ってキャリーにたくさん野菜を運んでくるんです。

「薬味野菜の里小国」店長の北里光子さんが、満面の笑みを湛えながらそう語る。

小国町には、生ごみ堆肥を使った地域循環農業の試みがある。そのスタイルがユニークだ。登録した住民や企業からの生ごみで作った堆肥で、農業の経験のない町の女性にプランターで好きな野菜を作ってもらい、アンテナショップの「薬味野菜の里小国」で販売する。〝キッチンファーム〟と呼んでもいい住民参加型の事業なのだ。

採れた野菜を、会員が店まで運んでくる。もちろんどの野菜も有機野菜だ。「野菜作りをはじめて、みんながとても楽しい、と元気になったんです」と、北里さんは微笑む。自分の野菜を、おいしいと食べてくれる人がいる。それがうれしくて、よりおいしい野菜を作ろうとはりきる。店の中は、お客様、作る人、北里さんたち売る人の笑い声でいつもにぎやかだ。

小国町の循環型農業のいちばんの推進力は、この笑顔なのかもしれない。

人と人を元気でつなぐ

薬味野菜の里小国　店長　北里光子さん

楽しくなくちゃエコじゃないと、毎日店頭でお客様との元気なコミュニケーションを心がける。野菜というより元気を売っているのかも、とは本人の弁。

小国町の人気店として

道の駅ゆうステーションのすぐ近く。その日に届いた新鮮な野菜が並ぶ。お客様がひっきりなしに訪れ、人気のほどがうかがえる。クルマで遠くから通ってくる人も多いとか。

おいしさが町の女性の生きがいに

町の女性たちがプランター栽培でいっさい農薬を使わずに育てた野菜は、ひとさわおいしい。おいしいから循環を大事にしたくなる。それが女性たちの生きがいに変わった。

「元気な交流」北里さんの大好きな言葉だ。その言葉通り、店には笑顔と元気があふれている。店頭にいると、繁盛の理由は、野菜のおいしさはもちろんのこと、訪れるみんなの笑顔が人を自然に集めるからだと実感する。

生ごみは集積して堆肥化するプラントで作られる。この堆肥も店の人気商品だ。有機栽培野菜はおいしいため自分で作りはじめる人も多い。小さな循環型農業の試みが、大きな動きを生んでいる。

大地に生かされている。この土地で、そう実感する。

水。森。空。田園。そして地熱。阿蘇外輪の小さな里は、そこにあるものだけでとても豊かだった。自然の営みを守りながら暮らしに生かしきた、日本の原風景を見た思いがする。

（上から）

鍋が滝：水のカーテンの裏側にも回れる珍しい滝。春のライトアップも美しい。

わいた地区の棚田：人が丁寧に手をいれてきた土地は、生態系が豊かに育まれている。

北里柴三郎記念館：偉大な細菌学者は、学習と交流の尊さを故郷の人々の心に遺した。

本記事内容は2015年取材時のものです。